

病院と社会をつなぐフリーマガジン

ブリッジ
BRIDGE

第2号

特集

座談会

—病院ボランティアが
もたらすものは何か?—

東海大学医学部付属病院
ボランティア室運営委員会委員長

福田 竜基先生

看護助手

小川 敏正さん

東海大学
病院ボランティアプロジェクトリーダー

大西 康仁さん



 東海大学チャレンジセンター

病院ボランティアプロジェクト

発行日：2014年11月1日



高齢者の増加に伴い、病院を支えるボランティアの需要も全国的に増していく傾向にあり、その役割も社会の動向とともに変化しています。病院でボランティアが積極的に活動することによって患者さんにどのような効果があるのか、病院や医療従事者にとってどのようなサポートとなるのか、病院は市民（学生）のボランティアにどのような役割を期待するのか、ボランティアの現状・未来について話し合いました。

<座談会メンバー紹介>

おがわ としまさ
小川 敏正さん

▶東海大学医学部付属病院で12年間看護助手として働いている。

ふくだ りゅうき
福田 龍基先生

▶東海大学医学部付属病院総合内科の准教授。ボランティアを支援する院内のスタッフで構成されるボランティア室運営委員会の委員長も務めている。

おおにし こうじ
大西 康仁さん

▶東海大学工学部建築学科2年次在籍。東海大学チャレンジセンター病院ボランティアプロジェクト2014年度リーダーを務める。

目次

02 座談会

—病院ボランティアがもたらすものは何か？—

医師、看護助手と学生ボランティアによるボランティアの現状・未来についての語り合い

06 密着

病院ボランティアの1日

病院ボランティア2団体に1日密着！

07

東海大学医学部付属病院 『オレンジクラブ』

09

病院ボランティア会 『ランパス』

11

ボランティアストーリー Volunteer Story

病院ボランティアを通してプロジェクトメンバーが学んだこと

13

ボイス VOICE

闘病中の入院生活でのボランティアとのふれあい

14

医療職紹介

患者を支える様々な医療職を紹介 今回は『理学療法士』

15

医療セミナー紹介

地域の方に医療知識を深めるセミナーを開催

16

病院ボランティア団体受け入れ先

17

プロジェクト紹介

18

編集後記

BRIDGE 第2号





福田 ベッドで安静にしていなければいけないとか、車いすだから狭い店内に入るのは難しい、そのような人はたくさんいますからね。

大西 実際に患者さんからのニーズもあるようですが、そのようなボランティアをすることは可能でしょうか。

福田 そうですね。ただ、お金をやり取りすることになると、色々なトラブルが発生する可能性があると思います。その点について十分対策ができれば、実施可能なボランティア活動の一つになると思いますね。

今後ボランティアに期待すること



▶座談会風景

——今後、高齢化が進み、病院で医療行為を受ける人が多くなると考えられます。それと同時にボランティアの役割が大きくなしていく可能性が十分にあります。そのような現状をふまえ、今後ボランティアに対して期待するものはありますか——

大西 私たちは声などから、そう思っている方が一人じやなれば、病院も無視するわけにはいかないですよね。委員みんなで考えてみて難しい問題がさほど無く、達成が簡単なものであればすぐに実施可能になるのではないかでしょう

大西 私たちができるボランティアを増やして活動を広げていくためにはどうすればよいでしょうか。

福田 病院に対して色々提案していくのが一番いいと思います。例えば、患者さんに「こんなボランティアがあつたらどう思いますか」と聞いてみたりして患者さんの声を集めて提案していけば活動が広がっていくのではないでしょうか。だって一番必要としている人たちの声なのだから、そう思っている方が一人じやなければ、病院も無視するわけにはいかないですよね。委員みんなで考えてみて難しい問題がさほど無く、達成が簡単なものであればすぐに実施可能になるのではないかでしょう

福田 ベッドで安静にしていなければいけないとか、車いすだから狭い店内に入るのは難しい、そのような人はたくさんいますからね。

大西 実際に患者さんからのニーズもあるようですが、そのようなボランティアをすることは可能でしょうか。

福田 そうですね。ただ、お金をやり取りすることになると、色々なトラブルが発生する可能性があると思います。その点について十分対策ができれば、実施可能なボランティア活動の一つになると思いますね。



ボランティアの気づきが病院をよくする

——皆様から見てボランティアは病院に対してどのように役割をはたしていると感じますか——

福田先生（以下福田）東海大学医学部付属病院ではオレンジクラブ（※P.4参照）や病院ボランティアプロジェクト（※P.4参照）、看護学科の学生など多くの方がボランティアを行ってくれています。

小川さん（以下小川）僕の勤める整形外科病棟にもボランティアさんに来ていただいているのですが、お掃除からお茶配り、食事の配膳など自分では気がつかないここまでやっていたら、とても助かっています。

大西 私たちボランティアに対して、患者さんからはどのくらい思っています。

福田 患者さんの中には自由に動くことができない方も多くいらっしゃいます。病院の中にはコンビニエンスストアもありますが自由に買い物に行けないので、それを買ってきてくれる、そんなボランティアがあるととても助かると思うのです。



——彼らの団体の代表者が集まり、意見を交わしあうボランティア室運営委員会を月に一度開催しています。その委員会でボランティアの方は、病院スタッフでは気がつかないような情報を提供してくれます。よりよい病院にするために非常に貴重な存在です。

大西さん（以下大西）ボランティア活動することで病院がよくなっているということがで

——病院ボランティアは病棟での活動や移動図書、受付での案内など様々なものがあります。このようなボランティアがあればさらによくなるのでは、といったものもありますか——

福田 患者さんの買い物のお手伝いをしてくれるボランティアって無いよね。

小川 それがあつたら患者さんはとても助かりますね。

福田 患者さんの中には自由に動くことができない方も多くいらっしゃいます。病院の中にはコンビニエンスストアもありますが自由に買い物に行けないので、それを買ってきてくれる、そんなボランティアがあるととても助かると思うのです。

——一部の病棟では、ボランティアによる買い物サポートが実施されているようですが、実際には、看護助手さんが、時々代行しているようです。しかし、希望される患者さんはすごく沢山いらっしゃるので、すべての方に対応することができないですしね。

小川 患者さんとしても忙しそうなスタッフには遠慮をしてしまい、頼みにくことがあります。

福田 患者さんととても忙しくなります。病院として特に力を入れて協力しています。

委員会でも常に前向きに検討することで、ボランティアさんの声をなるべく取り上げようとしています。病院のためになつてているからだと思いま

す。

大西 そうですね。病院のためになつているからだと思いま

す。

小川 それがあつたら患者さんはとても助かりますね。

福田 患者さんの中には自由に動くことができない方も多くいらっしゃいます。病院の中にはコンビニエンスストアもありますが自由に買い物に行けないので、それを買ってきてくれる、そんなボランティアがあるととても助かると思うのです。

福田 将来が決まっていない若いうちにボランティアに参加できる機会があるといのかも知れませんね。



病院ボランティアの1日

病院では医師や看護師のみならず、たくさんの人々が働いて患者さんを支えています。市民や学生が参加する『病院ボランティア』もその一つです。

『病院ボランティア』とは、患者さんがよりよい環境で治療が受けられるようにお手伝いをする活動です。本誌はその活動を紹介することで、ボランティアに興味を持っていただき、活動を始めるきっかけをつくりたいという思いから発行されました。

この企画ページでは『病院ボランティア』の一日に密着し紹介することで、読者のみなさんにより深く活動を知っていただけるよう、東海大学医学部付属病院オレンジクラブ様と病院ボランティア会ランパス様にご協力いただきました。

この2団体の密着取材を通して、私たちが気づかなかつた細かい気配りが成され安全に配慮しながらも主体的に行動することを学びました。



ボランティアが増えていくために

増えていくために

—病院ボランティアが増えればという意見がありました。どのようにすればボランティアが増えると思いますか—

小川 まず、ボランティアをやりたくても、どうしたらいいかわからない方が多くいると思うんですよ。

福田 そうですね。より具体的にどのような活動を行っているのかをわかりやすく広報していくこと。あとは、できる活動の種類を増やすというのも一つかもしれない。そうすれば「これなら私でもできる」というのが見つかりやすいと思う。

大西 福田先生がおっしゃった通りで、自分ができそうなものに目を向ける人は多いと思うですね。そういうのを広報するうえで生かしていくことが必要なのかなと思います。



▲座談会風景

福田 将来が決まっていない若いうちにボランティアに参加できる機会があるといのかも知れませんね。

これからは、僕たち学生やリタリア世代の方に病院ボランティアに興味を持つていただけるようになりますよ。

福田 そうなんですよ。高齢社会になるということは同時にリタイア世代の方々も増えるので、そこの方々が協力していただけやすいようにできればもっとボランティア人口は広がっていくと思うんですね。

大西 高齢の方が培われた強みやスキルをボランティアで生かせることを社会に伝えられるよう、広報誌『BRIDGE』が架け橋となればと思っています。学生などの若い世代はもちろん、シニア世代も巻き込んでいけば、逆に少子高齢化を生かして、ボランティアを増やすことができますね。将来的には病院とボランティアの協力関係をさらに強くしていけば、できる活動が増えて病院がよりよいものになるのかもしれませんね。

座談会を終えて

医師、看護助手、ボランティアのそれぞれの立場から、病院ボランティアが病院にもたらすものについて意見を交わしてもらいました。座談会を終えて感じたことは、病院側はボランティアに対して強い期待をしていることでした。

今後はさらに高齢者が増加し、医療を必要とする人が増えていきます。また、座談会では患者さんの求めるサービスの質が高くなっているという話もありました。そのような社会と患者さんの変化に呼応し、病院だけでなくボランティアも変わらなければならないことがわかりました。病院とボランティアが連携しあう形のあり方が今後の病院ボランティアを行なう上で重要になると感じました。

病院ボランティアプロジェクト 吉永 将太郎

ホール案内



ますだ つとむ
増田 勉さん

ボランティア歴
10年1ヶ月

移動図書



やなぎわ セツコ
柳屋 節子さん

ボランティア歴
2年6ヶ月

10年間ボランティア活動を続けています。先日、体が大きく下半身麻痺の患者さんを車いすに乗せてご案内したら、小柄な奥様から、「すごく助かります。」と言われ、この場に自分がいてよかったと思いました。このように人の役に立てたときや感謝の一言をいただいたときに喜びや、やりがいを感じます。

小児病棟でボランティア活動を行っています。子供たちが心を開いて甘えてくれることで、親御さんのいない時間を少しでも穏やかに過ごしてくれると嬉しいです。ボランティアを通して人との繋がりから学ぶことは多く、常に学びの場を与えていただいている。

本が好きなので、図書のボランティアなら自分にもできるのではないかと思い始めました。自分の興味を押し付けるのではなく、患者さんの立場に寄り添って、手にしやすい本、読みやすい本を選ぶのが課題です。たくさん的人が移動図書を利用してくださったときはとても嬉しいです。

病棟活動



たむら かよこ
田村 佳世子さん

ボランティア歴
5年

東海大学医学部付属病院

オレンジクラブ

東海大学医学部付属病院でボランティア活動を行っている「オレンジクラブ」は、神奈川県伊勢原市在住の方を中心に、10代～70代までのメンバー約100名が参加しています。「病棟の業務のお手伝いや、患者さんの立場になって主体的に行動する」という活動理念のもと、ホール案内、病棟、移動図書などの活動を行っています。活動日時は、毎週月曜日～土曜日の8時～16時までです。



本の修復



破れてしまった本は修復をして、長く楽しめるよう、一つ一つ丁寧に直していきます。

移動図書



本の選択

移動図書のボランティアは、まず初めに各病棟で貸し出す本を院内書庫で選び台車に載せます。どの患者さんにも興味を持ってもらえるような本を選びます。

患者さんとの コミュニケーション



活動を始める際に衛生面に十分に気をつけながら、看護師さんから今日の活動内容について指示を受けます。小児病棟では、子供たちと一緒に遊んだり泣いている赤ちゃんをあやしたり、抱っこしたりしています。どの病棟でも患者さんの安全には十分配慮しながら活動しています。

車いす移動の補助



患者さんの要望があれば、車いすを貸し出して、介助のお手伝いをします。必要な場合は、外来検査へ一緒に付き添います。

15:30

15:00

14:00

13:00

12:00

11:00

10:00

9:00

8:00



本を載せた台車を運びながら班ごとに病棟を巡回します。患者さんの要望に応じ、本を貸し出します。読み終わった本は、ナースステーションにあるカゴに返却してもらい、後日回収します。



食事の際の介助や下膳を行っています。お手伝いをする時は、優しく声をかけることに気をつけています。また整形外科病棟では、検査室まで患者をお連れしたり、買い物に付き添ったりもします。



車いすのブレーキの効きや、ホイールの定期点検と管理をしています。



エレベーター前の案内

元気に挨拶することを心がけ、外来患者さんに行き先の外来受付を尋ね、エレベーター誘導していきます。車いすは、先に来た患者さんから案内していきます。



病院ボランティア会ランパス
創始者 植野 恵子さん
ボランティア歴
26年

最初は、私たちのボランティアはどこかの病院だけでなく、ボランティアの要請があったらそこへ向かうという形でした。病院に着くと、マザー・テレサの精神で患者さんに仕えていました。その中に「足浴」という活動があり、それは患者さんの足をお湯で洗い、軽く揉んであげるというものです。よく、洗っている水の音が心地よいと言われます。患者さんに「気持ちよい」や「ありがとう」と言われると、とても嬉しい気持ちになります。また、この「足浴」は悩みを抱えた学生に勧めたら、考えが変わり前向きになつた人もいました。このことから、これは教育にも役に立つのではと考え、ランパスから「足浴」の活動をなくさないように守つていこうと思いました。

私たちは無償で行うことや自主・自立を認めてもらい、病院にプラスではなく患者さんへプラスになるような活動をこれからも続けていきたいと思っております。継続していくことが大事で、そうしているうちにボランティアの本当の意味が見えてくるのではないかと感じています。

病院ボランティア会 ランパス

(聖マリアンナ医科大学横浜市西部病院)

病院ボランティア会「ランパス」は、1988年にカトリック二俣川会員によって設立されました。現在、神奈川県を中心に13の病院で約320名のメンバーが参加し、60代～70代の方が多く在籍しています。マザー・テレサの祈りである「今日一日、私をお使いください」の精神で活動を行い、「ボランティアとは無償で奉仕するのはもちろんのこと、相手に気持ちをあわせ喜び合い、その中で多くのことを学び、静かな交わりを実感し、自分が創られる場である」という理念を持っています。活動は移動図書、受付案内、病棟、音楽ボランティアなどがあります。



移動図書



移動図書

図書室で本を運び、ブックトラックに載せて各病棟を巡回し本を貸し出します。病室に入る際には、笑顔で入り、患者さん一人一人に声をかけます。その際に、無料であることや、冊数の制限、返却期限が無いことも伝えます。また上下巻やシリーズ物はまとめて貸し出します。

15:00

14:30

12:30

11:30

11:00

10:30

8:30

その他

毎月第4火曜日には音楽ボランティアとしてミニコンサートを企画します。この他にも、曜日によっては小児病棟やNICU(新生児集中治療室)でのボランティア活動もあります。



食事の配膳・介助

配膳の前に、温かいお茶を注ぎ、お手拭きと一緒に患者さん一人一人のお盆に載せます。その後、配膳し必要があれば食事の介助も行います。介助の際は患者さんの誤飲に気をつけながら行います。



テープカット

医療の現場で、使用するテープを見本に合わせて作ります。消耗品なので、足りなくて困らないように多く作ることもあります。



受付案内

新規の患者さんの院内の案内や受付でのお手伝い、車いすやベビーカーの手配、介助も行います。

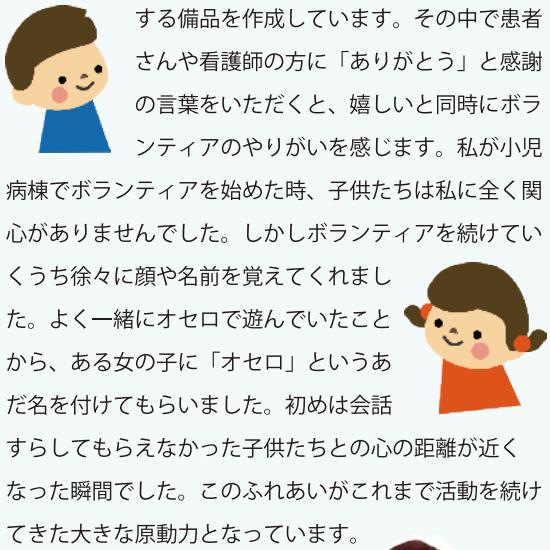
ボランティア ストーリー

Volunteer Story

- 私たちが病院ボランティアで得たもの -

東海大学チャレンジセンター病院ボランティアプロジェクトでは、病棟ボランティア活動をはじめ、学生が活動を通して社会と関わり、多くの課題と向き合い、様々な学びを得ています。そこで各メンバーが今までどのようなことを学び、何を得たのかインタビューしました。

私は中学の頃から保育士になることが夢でした。現在は家業を継ぐため土木を学んでいますが病院ボランティアで小児病棟に入院している子供とふれあうことができると聞き、保育士と近い経験ができると思い病院ボランティアプロジェクトに参加することにしました。活動では食事介助を通したコミュニケーションや、治療に使用する備品を作成しています。その中で患者さんや看護師の方に「ありがとう」と感謝の言葉をいただくと、嬉しいと同時にボランティアのやりがいを感じます。私が小児病棟でボランティアを始めた時、子供たちは私に全く関心はありませんでした。しかしボランティアを続けていくうち徐々に顔や名前を覚えてくれました。よく一緒にオセロで遊んでいたことから、ある女の子に「オセロ」というあだ名を付けてもらいました。初めは会話をすらしてもらえなかった子供たちとの心の距離が近くなった瞬間でした。このふれあいがこれまで活動を続けてきた大きな原動力となっています。



私は、病院でのボランティア活動を通して、自分の物事の考え方方が変わったと思います。昨年度は絵本制作(※P.17参照)

のサブリーダーを務めました。その中で企画書の作成や、病院スタッフとの関わりを持つなど、大学生活の中ではなかなか学べないことを体験してきました。自分たちが制作した絵本が完成した時は、病院以外にも、平塚市の図書館などにも設置させていただき、自分たちの努力が決して無駄ではなかったのだと実感することができました。プロジェクトに参加したきっかけは、交友関係を増やしたいという単純な思いからでした。病院でのボランティア活動を通して、患者さんや病院スタッフとの関わりも多く、大きな課題も経験しましたが、様々な体験によって自分自身が大きく成長することができたと思います。



工学部 土木工学科
3年 鈴木耀太



教養学部 人間環境学科
3年 桑原奏子



工学部 医用生体工学科
4年 鈴木大貴

私は現在4年生ですが、1年生だった時からずっと病院でのボランティア活動を行っており、長く活動をしている中で、心中に大きく残った出来事がありました。脳神経外科病棟で活動をしている時、車いすの掃除をする機会が多くありました。患者さんと直接関わるわけでもなく、ただ、ずっと車いすの掃除をしていました。それを続けていると、「この単純作業を繰り返すことが、本当に患者さんの力になっているのだろうか?」と、自分の行っている活動に自信が持てなくなってしまったことがあります。しかし、ある日車いすの掃除をしている時に、患者さんから「あなたたちが車いすをきれいにしてくれているから、私たちが気持ちよく使用することができます。ありがとうございます。」という言葉をかけていただきました。その時、自分の行っている活動への疑問が一気になくなり、自信を持つことができるようになりました。私たちの活動によって、ほんの少しでも患者さんの力になることができればという思いで、病院でのボランティア活動を続けています。





一医療職紹介 Vol. 2 理学療法士

病院には、医師、看護師をはじめ多様な医療職が存在しています。そのどれもが医療において非常に重要な役割があり、今回は『理学療法士』について紹介します。私たちががや病気が原因で思うように体が動かせなくなったり、再び元の生活に戻ることができるようリハビリを行い、そのときにサポートしてくれるのが理学療法士です。東海大学医学部付属大磯病院リハビリテーションセンターの三井裕子さんにご協力いただき、お話を伺いました。

仕事内容について

ががや病気などで身体に何らかの障害をきたした人に対して、起き上がる・座る・立つ・歩くなどの日常生活を行ううえで基本となる動作の改善を目指し、自立した生活が送れるよう支援しています。当院では、骨折、靭帯損傷、脳梗塞、肺炎、糖尿病など様々な患者さんがいます。硬くなってしまった関節を柔らかくしたり、弱くなってしまった筋力を強化したり、麻痺の回復や痛みの軽減を促す治療や動作練習、歩行練習など、その患者さんの病気や症状に合わせて治療を行っています。糖尿病の患者さんには



▼機械で足の筋力を測って回復の指標にします

▲平行棒での歩行訓練の様子



東海大学医学部付属大磯病院
診療協力部
リハビリテーションセンター
三井 裕子 さん

自宅でできる運動方法の指導や生活のアドバイスを行います。また時にはスポーツ選手にトレーニング指導を行うこともあります。

理学療法士になって感じること

治療の効果が得られて、痛みがとれたり、患者さんが一人でできる動作が少しずつ増えてきたりしたときは、やりがいを感じますし、何よりもそれを実感して患者さんやご家族が喜んでいる時がとても嬉しいです。逆に、いくらリハビリをしても痛みがとれなかつたり、思うように回復しなかつたりしたときは辛いです。患者さんの病気や症状は様々なので、理学療法士は幅広い知識と技術が必要です。まだまだわからないことも多く、日々勉強しなければ…と感じます。私たちは患者さんと一緒に毎日1対1でリハビリをするので関係性も強くなるうえにリハビリの進み具合が退院後の生活に大きな影響を及ぼすこともあるため、責任が大きいと感じると同時に、とてもやりがいのある魅力的な仕事をだと思っています。

理学療法士の今後について

理学療法士は病院だけでなく、クリニックや介護保険関連施設などで働いています。その他にも市役所や保健所などの行政施設、障害児の施設、フィットネスクラブ、プロスポーツチーム、医療機器メーカーなど活躍場所は広がっています。障害がある方はもちろん健康な方に対しても予防という観点から運動を指導するなど、今後様々な場面での活躍が期待されており、ますます必要とされる職業だと思います。

ボイス VOICE

～難病になって気づいたこと～

大学に通っていた20歳の時に、病気が判明しました。腹痛がひどくなり、段々と体重が減っていましたが、受診しても最初は原因がわかりませんでした。大きな病院に入院後、検査をしてようやくクロhn病という病気であることがわかりました。クロhn病とは、特定疾患にも指定されている、消化器全体における慢性の炎症性疾患です。医師からは、一生病気と付き合っていかなければならないとも言われました。

それから今まで入退院を繰り返しながら、病気と付き合っています。大学に通っていた時は、体調が悪くなりまともに授業を受けることができないなど辛いこともありました。今でも、食事制限をしたり、ストレスにより体調が悪くならないよう気をつけながら生活しています。

病気になって辛かったこと、大変だなと思ったことはもちろんあります。しかし、それだけではなく入院中に新しい仲間を作ることができたりと病気と付き合っていくうえで支えになるような出来事もありました。

また、ボランティアの人との出会いもありました。私が出会ったのは、本の貸し出しのボランティアの方々です。週に2回ボランティアが、本の貸し出しを行っていて、私は入院する度に利用させていただきました。好きなだけ本を借りることができ、多く借りたときは、病室まで届けてくれたり、お勧めの本を紹介してくれることもありました。入院中は、時間を持て余してしまうのでこのボランティアは助かりました。その他にも、医師や看護学生による演奏会に出会うこともありました。変化の少ない入院生活の癒しになり、気分転換になりました。

また、病気になったことで、健康のありがたみを人一倍感じています。現在は体調が落ちついていて、色々と習い事をしています。今は、普通の人よりも活動していると思います。



みくりや まなぶ
御厨 学 さん

会社員として働きながらも、クロhn病の患者団体で活動中。

病気というのは、マイナスのことかもしれません、その中の出会いや気づきは貴重な経験になっています。

現在私が活動しているクロhn病の患者会では、患者さんとそのご家族の方との交流や最新医療の情報提供、年に1度の専門医による講演会を行っています。患者会のスタッフは約10人ですが、スタッフ全員がクロhn病の患者です。患者会との関わりも病気と付き合っていく中での心の支えになっています。同じ病気を経験した人にしかわからないこともあります。励ましあっています。

自分が病気で辛かった時、ボランティアの方や患者会の方に支えられたからこそ、病気の人の支えになるような活動を行ってきました。これからは、現在行っている活動の他にも、移動図書のボランティアも始めてみたいと考えています。今後も、ボランティアなどを通して、病気の人の力になることができればと思っています。



病院ボランティア受け入れ先紹介

本誌で紹介させていただいた病院ボランティアを行っている団体や募集を行っている病院です。活動内容をご確認の上、ご連絡ください。



東海大学医学部付属病院 オレンジクラブ

住所：神奈川県伊勢原市下糟屋 143

最寄り駅：小田急小田原線 伊勢原駅

TEL : 0463-93-1121

募集条件：継続的に活動できる 18 歳以上の方

代表者の声：院内に「和みや癒し」を感じていただける活動に
参加してみませんか？



東海大学医学部付属大磯病院

住所：神奈川県中郡大磯町月京 21-1

最寄り駅：JR 東海道本線 二宮駅

TEL : 0463-72-3211

募集条件：18 歳以上の健康で守秘義務を守れる方

代表者の声：ボランティアを始めてみませんか？



病院ボランティア会 ランパス

宛先：神奈川県横浜市瀬谷区ニツ橋町 229-2

病院ボランティア会ランパス 露木 真実子

募集条件：継続的に活動できる 18 歳以上の方

代表者の声：笑顔で患者さんのために働きましょう！



医療セミナーを開催しました！

うつ病の境界～あなたの大切な人は大丈夫？～



こわた
小綿 一平 先生

伊勢原まごころクリニック 院長
精神保健指定医
日本精神神経学会専門医



▲講演風景



▲スタッフ

☞うつ病ってなに？

精神病の 1 つであり、『心の風邪』と言われています。日本人の 15 人に 1 人は一生に一度はかかる可能性があると言われているため、決して珍しい病気ではありません。

☞なぜうつ病になってしまうのか？

うつ病をはじめとする多くの精神疾患の原因は、まだよくわかっていません。今のところ、先天的要因（遺伝や性格）にストレスといった社会的環境要因が加わって発症すると考えられています。考えられるストレスとしては、病気やけがといった身体的なダメージに対する不安や、更年期や子供の結婚（独立）といった失うことの虚しさ、卒業や就職といった環境の変化に対するプレッシャーなどと言われています。

☞家族はどのように接すればいいのか？

励ましや気晴らしの誘いはむしろ逆効果になります。あれこれ言うより見守ること、共に歩んでいくことが大事になります。また、ご家族自身のメンタルケアも大切です。辛くなったら主治医に相談をしましょう。

編集後記

本誌のタイトル『BRIDGE』には、「病院と社会をつなぐ架け橋になりたい」という思いが込められています。

私たちは日々の活動を通して患者さんや病院関係者、ボランティアを行っている方々と密接な関わりを持つ中で、「もっとボランティアをする人が増えれば、より患者さんの力になることができるのではないか」と感じています。こういった思いから、多くの方に病院ボランティアに関心を持っていただき、さらには活動を始めていただくきっかけにしてもらうため、本誌を発行することとなりました。

第2号となる本誌は、「病院ボランティアと関わる人の声を聞く」というテーマのもと制作されました。特集に「病院ボランティアがもたらすものは何か」をテーマにした座談会と、「ボランティア団体への1日密着取材」を取り上げました。取材を受けていただいた方や病院の方など、ご協力いただいたみなさんの笑顔を思い出し、今回も無事に発行に至ることができました。本誌を通して、多くの方に病院ボランティアについて知っていただくことで、「病院」と「社会」をつなぐことができればと願っています。



編集スタッフ

大西康仁 佐藤京香
梶原大輔 花井啓利
野上裕太郎 久保佳那
佐々木晴奈 天野智之
吉永将太郎

問い合わせ先

メールアドレス

hospitalvolunteer.tokai@gmail.com

電話番号（東海大学チャレンジセンター推進室）

0463-50-2504

ホームページ、Facebookは、「東海大学チャレンジセンター病院ボランティアプロジェクト」で検索

Twitterは、「@TokaiHospitalv」で検索



病院ボランティアプロジェクト

メンバーを募集しています。
東海大学生なら誰でも大歓迎！
左記に気軽にご連絡ください。

▼ホームページ



▼Facebook



東海大学チャレンジセンター 病院ボランティアプロジェクト



2014年度プロジェクトリーダー
大西 康仁

病院ボランティアプロジェクトは東海大学生による学生ボランティアです。2006年に東海大学チャレンジセンターに発足し、2014年で9年目を迎えた。本学医学部付属病院を拠点に病棟ボランティアや院内コンサートなど、様々な企画を実施しています。すべての企画は「患者さんと同じ目線に立ち、入院生活における不安要素を緩和する」という理念のもと、学生で企画を進め、病院関係者をはじめとした、たくさんの方々からのご協力をいただきながら活動をしています。



本学医学部付属病院にて整形外科病棟、脳神経外科病棟、小児病棟、混合病棟で活動しています。整形外科病棟と脳神経外科病棟では患者さんのベッドサイドケアを主な活動内容とし、治療に使用する部品の作成や食事の配膳下膳、また食事介助を通して患者さんとのふれあいを大切にしています。小児病棟や混合病棟では入院している子どもたちに本の読み聞かせや一緒にトランプなどのゲームをして遊んでいます。



院内コンサート



ワークショップ

『ワークショップ』は地域の方々や病院・福祉施設で活動されているボランティアの方とともに、ボランティアの持つ問題点や可能性について意見交換をし、考えを深めることを目的としています。2013年度は本学健康科学部教授、妻鹿みみ子先生にボランティアについての基調講演をしていただいた後、グループに分かれて「病院ボランティアの可能性」について意見を交わしました。

年に2回、本学医学部付属病院のホールにて、患者さんとそのご家族を対象に『院内コンサート』を行っています。患者さんの入院生活をより良くするために、本企画では学生や社会人で結成された団体をお招きして、季節に応じた楽曲や会場の装飾でコンサートを開催します。コンサートでは、毎回100人以上の方々にお越しいただき、来場者の方から好評をいただいています。2014年度夏の『院内コンサート』では「夏祭り」をコンセプトに三味線とよさこいの団体をお招きしました。